

子どもの仲間集団における人気度、 友人関係および孤独感

前田健一・安藤優美子¹
(2000年9月30日受理)

Popularity, friendship, and loneliness in children's peer group

Kenichi Maeda and Yumiko Ando

This study was conducted to examine the loneliness associating popularity and mutual friendship in children. Fifth- and 6th-grade children ($N = 313$) completed the sociometric positive nomination measures, self-reports of loneliness, and self-perceptions of sociability, aggression, and withdrawal. Results indicated that children with three friends reported significantly less loneliness, and lower rating score of withdrawn social behavior than children who had no friends, one friend, and two friends. But these latter three groups did not differ significantly from each other. In addition, another analyses, concerning children who had one or more friends, identified that children in the high-popularity group reported significantly less loneliness, and lower rating score of withdrawn social behavior than children in the average- and low-popularity groups. These findings were generally consistent with the additive model; especially loneliness was determined by an additive combination of withdrawn social behavior, low peer acceptance, and few or no friendships.

Key Words: peer group, popularity, friendship, loneliness, withdrawn social behavior.

キーワード：仲間集団、人気度、友人関係、孤独感、引っ込み思案の社会的行動

大人や青年の孤独感に関する研究では、孤独感の自己報告測度が広く使用され、人間関係に問題や困難を抱える人々を識別するのに活用されている（たとえば、Peplau & Perlman, 1982）。それに対して、子どもの孤独感に関する研究は比較的少ない。子どもの孤独感研究が乏しい理由の1つは、一般に年少の子どもは孤独感を感じないのではないかという研究者側の前提にあったという（Asher, Parkhurst, Hymel, & Williams, 1990）。しかし、Asher, Hymel, & Renshaw (1984)による孤独感の自己報告測度の開発以来、児童や幼児でも、仲間関係から派生する孤独感を経験していることを示す研究が報告されるようになった（Asher & Wheeler, 1985；Cassidy & Asher, 1992；Crick & Ladd, 1993；Hymel, Rubin, Rowden, & LeMare, 1990；前田, 1995a, 1995b, 1998；佐藤・佐藤・高山, 1990）。

これらの研究は、子どもの中でも、仲間から受けた肯定的指名得点（人気度）の低い子どもほど孤独感が

高いこと（Asher, Hymel, & Renshaw, 1984）、あるいは仲間から拒否されている拒否児の孤独感が最も高いことを実証している（Asher & Wheeler, 1985；Cassidy & Asher, 1992；Crick & Ladd, 1993；前田, 1995a, 1995b, 1998；Parkhurst & Asher, 1992；佐藤・佐藤・高山, 1990）。いずれの研究も、特定の子どもの仲間集団の中でどの程度の人気度を得ているか、あるいはどのような地位タイプを占めているかに焦点を当て、孤独感との関連を検討したものである。

しかし、最近では仲間全員から受けた全般的受容度や人気度、あるいは仲間関係の良否だけでなく、子どもが特定の友人と満足の友人関係を形成し維持しているか否かに注目する必要があると指摘されている（Parker & Asher, 1993；Renshaw & Brown, 1993；Sanderson & Siegal, 1995）。特に、相互選択関係にある友人を少なくとも1名以上持つことは、子どもが極端な孤独感や社会的不満感に陥るのを防ぐ効果があると主張されている（たとえば、Asher, Parkhurst, Hymel, & Williams, 1990）。以下の3つの研究は、この

¹ 道後小学校

主張を検討している。

Renshaw & Brown (1993) は仲間受容度の低い小3～小6の児童59名を友人数0人群、1人群、2人群に分けて孤独感を比較した。その結果、友人数2人群の孤独感は友人数0人群よりも低かったが、友人数0人群と友人数1人群の孤独感には有意差が見られなかった。Parker & Asher (1993) は小3～小5の児童881名を相互選択の友人を1名以上持つ友人有群と無群に分類し、孤独感を比較した。その結果、友人の有無の主効果が有意となり、友人無群の孤独感が友人有群よりも有意に高かった。しかし、この差は高受容児群、中受容児群、低受容児群の3群に共通していた。また、仲間受容度の主効果も有意となり、低受容児群の孤独感が最も高く、次いで中受容児群となり、高受容児群が最も低かった。しかし、友人の有無と仲間受容度との交互作用が有意でなかったため、この3群間差は友人無の場合に限定される結果ではなかった。さらに、Sanderson & Siegal (1995) は、幼児を対象に安定した友人を持たない場合には拒否児群の孤独感が平均児群よりも有意に高いが、安定した友人を持つ場合には拒否児群と平均児群の孤独感に差がないことを見出している。しかし、安定した友人を持つ拒否児群は6名から構成され、安定しない友人を持つ拒否児群は3名しかいなかった。各群の人数が少ないことから、特定の拒否児の孤独感に影響されている可能性もあり、彼らの結果がどの程度の一般性を持つか再検討する必要がある。

以上の3つの研究 (Parker & Asher, 1993; Renshaw & Brown, 1993; Sanderson & Siegal, 1995) は、相互選択の友人を持つことが子どもの孤独感を緩和させる可能性を示唆している。しかし、友人のいない子どもの孤独感に比べて、何人の友人を持つことが最も有効な緩和効果をもつのかについては一貫した結論に達していない。また、Parker & Asher (1993) の結果から、友人を1名以上持つ場合にも、仲間受容度の高低によって孤独感に相違が生じる可能性が示唆される。そこで本研究では、まず相互選択の友人数に基づいて0人群、1人群、2人群、3人群の4群を構成し、何人の友人数の場合に最も孤独感が低くなるのかを比較検討する。次に、本研究では1名以上の友人を持つ子どもだけを選出し、人気度に基づく人気高群、中群、低群の孤独感を比較し、友人を持つ子どもだけに限定した場合にも、なお人気低群の孤独感が最も高くなるのかを明らかにする。

ところで、Asher, Parkhurst, Hymel, & Williams (1990) は、孤独感に関する1つの加算モデルを提唱している。それによると、強い孤独感は、いくつかの

要因の組み合わせによって予測されると考えられている。それらの要因とは、引っ込み思案の社会的行動、仲間受容度の低さ、友人がいないか少数であること、内的・安定的な原因帰属スタイルなどである。そこで、本研究では、社交性や攻撃性の社会的行動と同時に、引っ込み思案の社会的行動を取り上げ、引っ込み思案が社交性や攻撃性よりも、子どもの孤独感と同様の群間差を示すか否かを検討する。さらに、本研究では相関分析を通して、引っ込み思案が社交性や攻撃性よりも、子どもの孤独感と強い関連を示すか否かを検討する。

方 法

対象児

小学校5年生162名(男子76名、女子86名)と6年生151名(男子81名、女子70名)の合計313名であった。5年生と6年生ともに5学級であった。

手続き

放課後の約1時間を利用し、以下の調査を学級ごとに集団で実施した。

(1)友人調査：学級の中で、「なかのよいお友達」の名前を大切だと思う順番に3名以内書かせた。

(2)社会的行動特徴の調査：対象児自身の社会的行動特徴について5段階で自己評定させた。前田(1995a, 1995b)の社会的行動特徴項目を参考にして表1の12項目を作成し使用した。

(3)孤独感の調査：対象児自身の孤独感を5段階で自己評定させた。Asher & Wheeler (1985)を参考にして表2の11項目を作成し使用した。

なお、社会的行動特徴と孤独感の自己評定では、各項目の内容が自分に「いつもあてはまる」場合には5を、「ときどきあてはまる」場合には4を、「ふつう」の場合には3を、「あまりあてはまらない」場合には2を、「まったくあてはまらない」場合には1を当該項目の右端にある()内に記入させた。

得点化と群構成の方法

友人調査では友達を選択範囲を同性同士の友達に限定しなかったが、実際には同性同士の友達を選択するケースが多かった。そこで、以下の分類にあたっては、同性同士の友達選択の結果のみを使用した。表3は、以下の友人数と人気度の分類基準に基づいて、対象児を分類した人数内訳を示している。なお、表3では小5と小6を一括している。

(1)友人数の決定方法：友人数は次のように操作的に決定した。たとえば特定の対象児Aが3名の同性の友達B、C、Dを選択したとする。そこでB、C、D

はそれぞれ誰を選択しているかを調べる。その結果、B、C、Dの3名ともAを3名以内の友達の中に選択している場合には、Aの友人数を3名とする。B、C、Dの3名のうち、2名がAを選択している場合にはAの友人数を2名とする。同様にB、C、Dの3名のうち、1名がAを選択している場合にはAの友人数は1名となる。B、C、Dの3名のうち、誰もAを選択していない場合には、Aの友人数は0名となる。要するに、友人とは、3名以内の選択順序を無視した場合の相互選択関係を意味する。したがって本研究では、友人数は0～3までの範囲にわたる。友人数に応じて、対象児を友人数0人群、1人群、2人群および3人群の4群に分類した。

表1 行動特徴項目と因子分析の結果 (N=313)

項目	質問内容	因子			h ²
		I	II	III	
2.	遊んでいるお友だちの中に入ろうとしてもなかなか入れません。	.60	.04	-.19	.39
4.	お友だちに話しかけようとするとうそぶります。	.51	.07	.02	.26
5.	恥ずかしがりやです。	.56	.05	.03	.32
7.	おとなしくて目立ちません。	.56	-.05	-.16	.34
6.	遊んでいるお友だちの邪魔をします。	.08	.50	-.12	.27
8.	自分のしてほしいことを、むりやりお友だちにさせます。	.03	.55	-.07	.31
10.	自分の思うとおりにならないと、すぐに腹をたてます。	.06	.65	-.05	.43
12.	お友だちとよく言い争いになります。	-.01	.49	-.04	.24
1.	誰にでも親切です。	.12	-.35	.42	.31
3.	話したいことがあっても、お友だちの話を終わるまで聞いてから話します。	.05	-.23	.44	.25
9.	自分がしてもらいたいことをお友だちに、上手に頼むことができます。	-.26	.09	.51	.33
11.	グループでなかよく遊ぶことができます。	-.38	-.11	.56	.47
	平方和	1.49	1.42	1.03	3.93
	寄与率	.12	.12	.09	.33

(2) 人気度群の分類方法：まず同性同士の友人調査の結果から、対象児ごとに仲間から受けた被選択数の総数を集計した。この被選択総数は、各対象児の学級内における人気度をあらわしている。次に、対象児ごとの被選択総数を、本人を除く学級の同性仲間の人数で除算した後、5学級の男子全体または女子全体の平均値とSDに基づいて標準得点(z点)へ変換した。このz点に基づいて、各対象児を3つの群のいずれかに分類した。分類基準は、人気高群(z>0.5)、人気中群(-0.5<z<0.5)、人気低群(z<-0.5)であつ

た。

表2 孤独感の項目

1. なかよしのお友だちが欠席したら、その日は他に話す人が見つからないと思います。
- (2) 学級の中にたくさんのお友だちがいます。
3. 学級の中でなかよしのお友だちをつくるのは、むずかしいと思います。
- (4) 学級の誰かに手伝ってほしいとき、頼めるお友だちがいます。
5. 学級の中では、一緒に遊んでくれるお友だちがいないと思います。
- (6) 学級のお友だちから好かれていると思います。
7. 学級の中ではひとりぼっちだと思います。
- (8) 学級のお友だちは、あなたが話しかけるとすぐに、あなたを仲間に入れてくれると思います。
9. あなたの言うことを、他のお友だちは聞いてくれないと思います。
- (10) 新しいお友だちとすぐになかよくなれると思います。
11. 学級のみんなとうまく付き合えなくて、さみしいと思います。

注1) () 付きの項目は逆転項目であり、逆に得点化した項目である。

(3) 社会的行動特徴の尺度得点：社会的行動特徴の12項目の各評定値に基づいて、因子分析をした。表1はその結果から、バリマックス回転後の因子構造行列を示したものである。因子負荷量の絶対値が0.40以上の項目に注目すると、第I因子は項目2、4、5、7の4項目から成っている。これら4項目は引っ込み思案傾向や対人的消極性に関連しているため、第I因子を「引っ込み思案」と命名した。第II因子を構成する項目6、8、10、12は攻撃性に関連しているため、第II因子を「攻撃性」と命名した。同様に、項目1、3、9、11から構成される第III因子を「社交性」と命名した。対象児ごとに、それぞれの因子を構成する4項目ずつの評定値の平均値を算出して、引っ込み思案尺度得点、攻撃性尺度得点および社交性尺度得点の各尺度得点を構成し、以下の分析で使用した。各尺度得点は1点～5点の範囲にわたり、得点は高いほど各尺度の傾向が強いと自己評定していることを意味する。

表3 対象児の人数内訳

友人数	人気高群		人気中群		人気低群	
	男	女	男	女	男	女
0人群	2	0	7	6	15	10
1人群	7	6	25	26	28	40
2人群	16	22	33	19	0	0
3人群	18	25	6	2	0	0
計	43	53	71	53	43	50

(4) 孤独感得点：対象児ごとに項目1、3、5、7、9、11では「いつもあてはまる」場合の5点～「まったくあてはまらない」場合の1点の範囲で得点化した。

残りの2、4、6、8、10の5項目は逆転項目であり、「いつもあてはまる」場合の1点～「まったくあてはまらない」場合の5点の範囲で逆の得点化をした。11項目の得点を加算し、その合計得点を孤独感得点とした。したがって、孤独感得点は11点～55点の範囲にわたり、得点は高いほど孤独感が強いことを意味する。Cronbachの α 係数を算出して孤独感項目の内の一貫性を検討したところ、対象児全体($N=313$)で $\alpha=.823$ であった。

結 果

友人数による群間比較

表4～表7は、男女別に友人数に基づいて4群に分類し、社会的行動特徴に関する3つの尺度得点と孤独感得点について、各群の平均値と標準偏差(SD)を示したものである。以下の分散分析では、小5と小6の学年要因も加えた4(友人数) \times 2(学年) \times 2(性別)の3要因分散分析を実施した。しかし、いずれの分析でも学年の主効果および学年に関連する交互作用はすべて有意でなかったため、表4～表7では学年を一括して示している。なお、以下では有意な結果のみを報告する。

表4の社交性尺度得点に関する分散分析の結果、性別の主効果が $F(1, 297) = 9.27, p < .01$ で有意となり、女子($M=3.70$)が男子($M=3.46$)よりも有意に高かった。

表4 社交性尺度得点の平均値(SD)

友人数	男子	女子
0 人群	3.52(0.80)	3.77(0.57)
1 人群	3.47(0.68)	3.63(0.61)
2 人群	3.34(0.63)	3.73(0.62)
3 人群	3.62(0.71)	3.83(0.56)

表5の攻撃性尺度得点に関する分散分析の結果、性別の主効果が $F(1, 297) = 11.00, p < .01$ で有意となり、男子($M=2.04$)が女子($M=1.74$)よりも有意に高かった。

表6の引っ込み思案尺度得点に関する分散分析の結果、友人数の主効果が $F(3, 297) = 4.40, p < .01$ で有意となった。ダンカン法による多重比較の結果、0 人群($M=2.36$)、1 人群($M=2.35$)、2 人群($M=2.22$)の3群はいずれも、3 人群($M=1.90$)よりも有意に高かった(順に $p < .01, p < .01, p < .05$)。

表7の孤独感得点に関する分散分析の結果、友人数の主効果が $F(3, 297) = 7.25, p < .001$ で有意となった。多重比較の結果、0 人群($M=24.70$)、1 人群(M

表5 攻撃性尺度得点の平均値(SD)

友人数	男子	女子
0 人群	2.05(0.69)	2.00(0.62)
1 人群	2.04(0.63)	1.77(0.66)
2 人群	2.00(0.74)	1.60(0.47)
3 人群	2.09(0.87)	1.73(0.74)

表6 引っ込み思案尺度得点の平均値(SD)

友人数	男子	女子
0 人群	2.24(0.79)	2.53(0.91)
1 人群	2.22(0.76)	2.47(0.84)
2 人群	2.10(0.86)	2.35(0.84)
3 人群	1.93(0.69)	1.87(0.76)

$=23.86$)、2 人群($M=22.47$)の3群はいずれも、3 人群($M=19.29$)よりも有意に高かった(いずれも $p < .01$)。

表7 孤独感得点の平均値(SD)

友人数	男子	女子
0 人群	24.33(8.62)	25.25(9.13)
1 人群	23.45(6.92)	24.21(7.97)
2 人群	22.84(5.83)	22.02(6.18)
3 人群	19.88(4.84)	18.78(5.53)

人気度による群間比較

人気高群、中群、低群の特徴差を検討するにあたって、表3の対象児の人数内訳の中から、友人を1名以上持つ対象児のみを選出した。以下の分析では、表3の0 人群の合計40名を除く残り273名のデータに基づいている。すなわち、以下の分析では、1人以上の友人を持つ児童の中でも、学級内における人気度の高低によって行動特徴や孤独感に差が生じるか否かを検討する。表8～表11は、男女別に人気度の3群について、3つの尺度得点と孤独感得点の平均値と標準偏差(SD)を示したものである。上述の友人数による群間比較において学年差や学年に関連する交互作用は有意でなかったため、以下の分散分析では学年を一括し、3(人気度) \times 2(性別)の2要因分散分析を実施した。

表8 社交性尺度得点の平均値(SD)

人気度	男子	女子
高 群	3.47(0.71)	3.84(0.59)
中 群	3.49(0.60)	3.57(0.65)
低 群	3.30(0.75)	3.65(0.54)

表8の社交性尺度得点に関する分散分析の結果、性別の主効果が $F(1, 267) = 10.82, p < .01$ で有意となり、女子($M=3.70$)が男子($M=3.45$)よりも

有意に高かった。

表9の攻撃性尺度得点に関する分散分析の結果、性別の主効果が $F(1, 267) = 15.94, p < .001$ で有意となり、男子 ($M = 2.03$) が女子 ($M = 1.71$) よりも有意に高かった。さらに、人気度×性別の交互作用が $F(2, 267) = 3.04, p < .05$ で有意となった。多重比較の結果、男女差は人気高群と低群では有意であった(いずれも男子>女子)が、中群では男女間に有意差は見られなかった。また、女子の人気中群は高群や低群よりも有意に高かった。

表9 攻撃性尺度得点の平均値 (SD)

人気度	男子	女子
高群	2.09(0.70)	1.64(0.55)
中群	1.98(0.76)	1.93(0.75)
低群	2.08(0.64)	1.56(0.59)

表10の引込み思案尺度得点に関する分散分析の結果、性別の主効果が $F(1, 267) = 3.85, p < .05$ で有意となり、女子 ($M = 2.32$) が男子 ($M = 2.12$) よりも有意に高かった。また、人気度の主効果が $F(2, 267) = 8.10, p < .01$ で有意となり、人気高群 ($M = 1.99$) が中群 ($M = 2.26$) と低群 ($M = 2.49$) よりも有意に低かった(順に $p < .05, p < .01$)。

表10 引込み思案尺度得点の平均値 (SD)

人気度	男子	女子
高群	1.92(0.65)	2.04(0.86)
中群	2.15(0.86)	2.42(0.77)
低群	2.38(0.76)	2.58(0.84)

表11の孤独感得点に関する分散分析の結果、人気度の主効果が $F(2, 267) = 10.02, p < .001$ で有意となり、人気高群 ($M = 20.19$) が中群 ($M = 23.17$) と低群 ($M = 24.79$) よりも有意に低かった(いずれも $p < .01$)。

表11 孤独感得点の平均値 (SD)

人気度	男子	女子
高群	20.63(5.20)	19.85(5.76)
中群	22.97(6.44)	23.45(7.34)
低群	24.54(6.80)	24.98(8.07)

友人数と人気度による群間比較

表3の対象児の人数内訳から、男女別に友人数が0人群と1人群を選出した。しかし、人気高群では0人群が2名(男子)と0名(女子)であったので、人気高群は除外し、人気中群と低群のみを分析対象とした。

すなわち、各得点について2(友人数:0人群と1人群)×2(人気度:人気中群と低群)×2(性別)の3要因分散分析を実施した。その結果、社交性尺度得点、攻撃性尺度得点および引込み思案尺度得点では、いずれの主効果も交互作用も有意でなかった。しかし、孤独感得点では人気度の主効果が $F(1, 149) = 4.28, p < .05$ で有意となり、人気低群 ($M = 25.24$) が人気中群 ($M = 22.98$) よりも有意に高かった。

得点間の相関関係

表12は、各得点間の相関分析を行い、その結果をまとめたものである。全体の相関値を見ると、人気度と友人数は比較的高い正相関を示している。これは、表3の人数内訳とも対応している。表3から、人気高群では友人数が0人や1人の者は少なく、逆に人気低群では友人数が2人や3人の者は皆無である。多くの仲間から選択されている人気高群ほど、自分が選択した相手からも選択される可能性が高いと示唆される。次に孤独感の相関係数を見ると、人気度が高く、友人数が多く、社交性が高いほど、孤独感は低い関係にあることがわかる。逆に、攻撃性や引込み思案が強いほど、孤独感が高い関係にあるといえる。

表12 各得点間のピアソン積率相関係数

	男子 (N=157)	女子 (N=156)	全体 (N=313)
人気度-友人数	.630***	.742***	.685***
人気度-社交性	.058	.111	.077
友人数-社交性	.001	.083	.042
人気度-攻撃性	-.014	-.008	-.006
友人数-攻撃性	-.006	-.120	-.056
人気度-引込思案	-.207**	-.241**	-.225***
友人数-引込思案	-.125	-.229**	-.174**
人気度-孤独感	-.277***	-.301***	-.289***
友人数-孤独感	-.182*	-.272***	-.228***
社交性-孤独感	-.519***	-.570***	-.531***
攻撃性-孤独感	.159*	.289***	.218***
引込思案-孤独感	.574***	.569***	.567***

注1) 引込思案は、引込み思案を意味する。

注2) *: $p < .05$ **: $p < .01$ ***: $p < .001$

考 察

表3から、友人数0人群の占める比率を算出すると、人気高群の男子(5%)と女子(0%)、人気中群の男子(10%)と女子(11%)、人気低群の男子(35%)と女子(20%)となる。全体では13%(40/313)となり、Parker & Asher (1993)の22%(197/881)よりもやや少ない。本研究では友人数と人気度の要因を組み合わせ分析するつもりであったが、人気高群の友人数0人群が少なかったため、結果的には友人数と人気度の要因を分けて分析することにした。

友人数に関する本研究の結果は、友人数が3人になると、友人数0人の場合よりも、孤独感が有意に低下することを示した。しかし、友人数1人群と2人群は0人群と有意差がなく、むしろ3人群よりも孤独感が有意に高かった。これらの結果は、本研究と同様に友人数0人群、1人群、2人群および3人群を比較した Renshaw & Brown (1993) の結果と異なる。Renshaw & Brown (1993) は、本研究よりも年齢範囲の広い小3～小6の子ども128名を一括して分析しているの、本研究と直接比較できない部分もある。しかし、時期1では友人数による孤独感に差がなかったものの、時期1から10週間後の時期2および時期1から1年後の時期3では、ともに友人数0人群の孤独感が1人群、2人群および3人群の3群よりも有意に高く、後者の3群間には有意差が見られていない。

孤独感の差を決定づける友人数が両研究間で異なるのは、いくつかの理由によると考えられる。第1に、友人数0人群の人数比率が異なることである。本研究の13% (40/313) に対して、Renshaw & Brown (1993) では時期1の19% (23/119)、時期2の20% (23/116)、時期3の19% (20/108) であった。彼らの研究では0人群の比率がやや高いので、孤独感の高い児童が多く含まれ、その結果として0人群と他の群の間に有意差が見られた可能性も否定できない。

第2に、友人関係の質的側面に相違があるかもしれない。友人関係は、友人数という量的側面と同時に、親密度などの質的側面が重要な意味をもつ。親密な友人関係であれば、たとえ1人の友人を持つだけでも、情緒的・精神的サポートを通して孤独感を緩和すると考えられる。また Berndt & Perry (1986) は、子どもの親密な友人関係では親密な遊びや相互作用だけでなく、しばしば意見の不一致や対立が見られることを報告している。日本の子どもは友人とけんかや対立を引き起こさないように気を遣っていると考えれば、本研究の友人数1人群や2人群の子どもは、Renshaw & Brown (1993) の1人群や2人群の子どもよりも、親密度の低い友人関係を持つといえるのかもしれない。引っ込み思案の結果は、この解釈と関連しているように思われる。本研究の引っ込み思案尺度得点では、友人数3人群のみが他の3群よりも有意に低く、孤独感の結果と対応した結果であった。親密な友人関係が社会的・情緒的適応を促す (Parker & Asher, 1993) のであれば、本研究の友人数1人群や2人群の引っ込み思案が友人のいない0人群よりも、いくぶんは高くなると考えられる。しかし、本研究の結果が示すように、0人群の引っ込み思案尺度得点は1人群や2人群のそれと有意差がなかった。この点からも、本研究の1人

群や2人群の子どもは、3人群よりも友人のいない0人群に近い特徴を示している。今後の研究では、友人数1人群や2人群において友人関係の親密度が異なる下位群を構成して、この問題を明らかにする必要がある。

次に人気度に関する結果は、従来の仲間関係に関する結果 (Asher, Hymel, & Renshaw, 1984; Asher & Wheeler, 1985; 前田, 1995a, 1995b, 1998; 佐藤・佐藤・高山, 1990) とほぼ一致していた。すなわち、友人を1人以上持つ子どもに限定しても、人気低群の孤独感の人気高群や中群よりも高かった。また、友人数0人群と1人群に限定して分析したときには、人気低群の孤独感の人気中群よりも有意に高かった。これらの結果は、友人の有無にかかわらず、仲間集団の中で多くの仲間から人気があるか否かが、子どもの孤独感に影響することを示すものである。

ところで、孤独感に関する加算モデル (Asher, Parkhurst, Hymel, & Williams, 1990) では、いくつかの要因の組み合わせが孤独感を強めると考えている。それらの要因のうち、人気度と友人数に関しては本研究でも孤独感に強く関連することを確認できた。もう1つの要因とされている引っ込み思案行動については、表12の相関表から孤独感と関連することが明らかである。表12を見る限り、友人数や人気度よりも、むしろ引っ込み思案や社交性のような行動特徴が孤独感と高い相関値を示している。人気度や友人数も、おそらく社交性や引っ込み思案などの社会的行動を継続した結果として生じるものであろう。その意味で、本研究の結果は、引っ込み思案を引き起こす不安要因を低減させながら、子どもの社交性を高めることが孤独感を低下させ、社会的・情緒的適応を促すとする社会的スキル訓練の考え方を支持するものといえる。

最後に、対象児全員 ($N=313$) に基づく分析では、社交性尺度得点と攻撃性尺度得点において男女差が見られた。社交性は女子が男子よりも高いと自己評価し、逆に攻撃性は男子が女子よりも高いと自己評価していた。ただし、社交性は児童から見ても肯定的な行動特徴であると考えられるのか、男子でも女子でも平均評定値は3.34～3.83の高い値を示した (表4参照)。それに対して、否定的な行動特徴と考えられる攻撃性では男子でも2.00～2.09と低い値を示した (表5参照)。表3から友人数0人群に該当する40名を除いて分析した場合にも、社交性は3.30～3.84の高い値 (表8参照) を、攻撃性は1.56～2.09の低い値 (表9参照) を示し、男女差は基本的に類似していた。これらの結果から、少なくとも小学校高学年の児童では、友人数や人気度にかかわらず、社交性は全般に高いレベルで男女差が

あり、攻撃性は低いレベルで男女差があると指摘できる。

これらの男女差は、本研究と同様の社会的行動特徴項目を使用した小林・梶山(1998)と一致する。小林・梶山(1998)は、小4、小5、小6の児童に自己評定させ、35項目の社会的行動特徴の因子分析から、向社会性、攻撃性、引っ込み思案の3つの尺度得点を構成している。男女差を検定した結果、向社会性では女子が男子よりも有意に高く、攻撃性では逆に男子が女子よりも高く、引っ込み思案では男女差が見られなかった。本研究も小林・梶山(1998)も自己評定を使用しているので、たとえば女子の社交性が客観的に高いのか、あるいは女子の社交性が主観的に高く自己評価されやすいだけなのかを決定できない。今後は、子どもの自己評価を教師評価や仲間評価によって補足しながら、これらの性差を再確認すると共に、これらの性差を生じさせる発達の要因について検討する必要がある。

引用文献

- Asher, S. R., Hymel, S., & Renshaw, P. D. 1984 Loneliness in children. *Child Development*, **55**, 1456-1464.
- Asher, S. R., Parkhurst, J. T., Hymel, S., & Williams, G. A. 1990 Peer rejection and loneliness in childhood. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. pp.253-273. New York: Cambridge University Press. 山崎晃・中澤潤 監訳 1996 子どもと仲間の心理学—友だちを拒否するころ— pp.246-263. 北大路書房
- Asher, S. R., & Wheeler, V. A. 1985 Children's loneliness: A comparison of rejected and neglected peer status. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **53**, 500-505.
- Berndt, T. J., & Perry, T. B. 1986 Children's perceptions of friendships as supportive relationships. *Developmental Psychology*, **22**, 640-648.
- Cassidy, J., & Asher, S. R. 1992 Loneliness and peer relations in young children. *Child Development*, **63**, 350-365.
- Crick, N.R., & Ladd, G.W. 1993 Children's perceptions of their peer experiences: Attributions, loneliness, social anxiety, and social avoidance. *Developmental Psychology*, **29**, 244-254.
- Hymel, S., Rubin, K. H., Rowden, L., & LeMare, L. 1990 Children's peer relationships: Longitudinal prediction of internalizing and externalizing problems from middle to late childhood. *Child Development*, **61**, 2004-2021.
- 小林正幸・梶山千絵子 1998 社会測定的地位指数の低い児童が持つ社会的スキルの発達の变化 東京学芸大学紀要, 第1部門, 教育科学, **49**, 245-251.
- 前田健一 1995a 児童期の仲間関係と孤独感: 攻撃性、引っ込み思案および社会的コンピタンスに関する仲間知覚と自己知覚 教育心理学研究, **43**, 156-166.
- 前田健一 1995b 仲間から拒否される子どもの孤独感と社会的行動特徴に関する短期縦断的研究 教育心理学研究, **43**, 156-265.
- 前田健一 1998 子どもの孤独感と行動特徴の変化に関する縦断的研究—ソシオメトリック地位維持群と地位変動群の比較— 教育心理学研究, **46**, 377-386.
- Parker, J. G., & Asher, S. R. 1993 Friendship and friendship quality in middle childhood: Links with peer group acceptance and feelings of loneliness and social dissatisfaction. *Developmental Psychology*, **29**, 611-621.
- Parkhurst, J.T., & Asher, S.R. 1992 Peer rejection in middle school: Subgroup differences in behavior, loneliness, and interpersonal concerns. *Developmental Psychology*, **28**, 231-241.
- Peplau, L. A., & Perlman, D. (1982) *Loneliness: A sourcebook of current theory, research and therapy*. New York: Wiley. 加藤義明 監訳 1988 孤独感の心理学 誠信書房
- Renshaw, P. D., & Brown, P. J. 1993 Loneliness in middle childhood: Concurrent and longitudinal predictors. *Child Development*, **64**, 1271-1284.
- Sanderson, J. A., & Siegal, M. 1995 Loneliness and stable friendship in rejected and nonrejected preschoolers. *Journal of Applied Developmental Psychology*, **16**, 555-567.
- 佐藤容子・佐藤正二・高山巖 1990 仲間関係に問題をもつ子ども—自己知覚測度による分析— 宮崎大学教育学部紀要, 教育科学, **68**, 9-18.